

## 高嶋 正士 先生を偲んで

藤田 主一（日本体育大学名誉教授）

日本応用心理学会名誉会員、共立女子大学名誉教授の高嶋正士先生は、2021（令和3）年2月13日（土）の早朝、最愛の奥様に看取られながら穏やかなお姿でお浄土へ旅立たれました。享年96（満95歳）のご生涯でした。高嶋先生は、心理学者として本学会の発展に大きく貢献されたばかりでなく、古刹の住職として郷里新潟の人びととの仏縁を大切にされてこられた先生です。高嶋先生と私とは伯父-甥（母親の実兄）という極めて身近な関係でもあり、また年齢的には25歳の開きがあったにもかかわらず、幼いころからことのほか可愛がっていただきました。奥様から「もしかして」とのご連絡を頂戴し、ご逝去される2日前に急ぎお会いしたばかりで、思えばこれが最後のお別れになってしまいました。ご家族から亡くなられたとのお知らせをいただいたとき、覚悟はしていたものの、やはり言葉にならないほどの衝撃とこれまでの感謝の気持ちを覚えずにはいられませんでした。ご家族ばかりでなく、本学会としても大切な人を失いました。ここで、高嶋先生をもっと知っていただきたく、少し長くなりますが先生の生い立ち等についてお伝えしておきたいと思います。ここに、高嶋先生のご経歴を振り返ること、先生との思い出を語ることで、追悼とさせていただきます。



高嶋 正士 先生

高嶋正士先生は、1925（大正14）年8月に、開基以来今日までおよそ450年の歴史を刻む浄土真宗本願寺派真照寺（新潟県上越市）の第16世として誕生されました。高嶋先生は、ご親族や檀家の人びとから当然のように第15世（父親）の後を継いで次期住職になることを望まれていました。その影響もあったのでしょうか。すでに4歳ごろから父親の伴僧をして檀家を回ったり、あるいは1人で檀家に読経して歩いたりすることで、小学校を卒えるころには関係する経典のほとんどを誦んじて読むことができたそうです。何という記憶力でしょうか。「門前の小僧習わぬ経を読む」の例え通りです。小学校を卒業すると京都の旧制平安中学校（西本願寺立）へ入学し、その後周囲から仏教学や真宗学を学ぶことを期待されて龍谷大学（旧制）へと進まれました。しかし一方で、高嶋先生の人生選択に大きな転換が訪れたのは、戦後のGHQによる農地改革の政策でした。戦前戦後の昭和史に詳しい方々のご存知のように、それは寺や高嶋家に関係する財産（田畑などの不動産）が人の手に渡り、完全に無一物になることを意味します。庫裡も樹一本たりとも私物でなく宗教法人のものになることによって、両親や檀家の人びとから期待されていた僧侶一筋に生きていくという人生設計を大きく見直さなければならなくなったと思われる。高嶋先生は、このような思わぬ事態に遭遇しながら龍谷大学で学んでいたのですが、そのころから少なからず心理学に興味をもたれたようです。何とかして心理学を専門にしてみたいと思う反面、仏教学を学ぶ必要性もあり、深い葛藤の末に高名な仏教学者である大伯父の高嶋米峰氏（東洋大学第12代学長）に思い切って手紙を書かれました。米峰氏からは次のような歯切れよい返事がありました。「手紙拝見。心理学をやるも、仏教学をやるもよし。要は君の心構え一つだ。ただし、心理学をやるも、中途半端ないい加減な態度でやるならば、仏教を学ぶべし。その決意あらば大いに賛成すべし」と。何という力強い言葉でしょう。これで高嶋先生の人生が決まりました。なお、先生

の「正士」という名前は、『無量寿経』上巻にある「十六正士善思議菩薩…」の中から取り出したもので、米峰氏が名付け親です。龍谷大学を卒業後、高嶋先生は日本大学心理学科へ学士入学されますが、先生が日大へ進まれたのには理由があったのです。それは米峰氏と日大心理学科主任教授の渡辺徹先生とが師弟関係(米峰氏が師)にあり、心理学を学ぶのであれば渡辺教授の弟子になれと言われていたのです。さて、ここから高嶋先生の心理学者としての人生と第16世住職としての兼職が始まりました。このあたりの経緯については、先生の筆になる『応用心理学のクロスロード (vol.8)』(2016)の「クロスロード・エッセイ：私と応用心理学」にも掲載されていますのでご覧ください。

高嶋先生の学究としての研究分野のひとつは、やはり生い立ちとの関係が深いように思います。歴史ある寺の住職を平穩に継承することを願っていた檀家のびとや両親から、大学へ行くこと、さらに心理学者になることを反対されたのは「偉くなくてもらっては困る」といういわば当たり前の気持ちだったからです。そこで、先生は「偉いとは何だろう」という真面目な疑問の解明を研究テーマにされました。「偉大性の研究」がそれになります。学部から大学院修士課程へ進まれ、修士論文は『傑人性格の比較研究：特に法然・親鸞・日蓮・澤庵について』であり、その「補遺」であるF. ゴルトン、H. エリス、E. クレッチマーの文献研究を加えると全2巻750頁を超える大著です。続いて博士課程において『人格の偉大性要因に関する基礎的研究—偉人・優秀児を中心として—』の論文により文学博士の学位を取得しています。学位論文の主旨は千葉胤成先生、副査は古賀正義先生で、共に後年日大大学院の専任教授になられた先生方です。これらの研究は、後に『偉人・天才の心理学』という著書に結実しています。また、古賀先生と一緒にMCCベビータスタの標準化に携わったり、KIDSの開発に参加されたりし、乳幼児期の心理にも大きな関心を寄せられました。これらの研究成果については、著書・論文・学会発表等で報告されています。もちろん、高嶋先生は父親の後を受け僧侶としての職責も果たされました。僧侶は人の「死」と対面することがあるので、先生は「死」という人の厳かな終焉の場に向き合うことも日常だったはず。その意味から、先生は「ターミナルケア」「死の臨床」「看取り」「看護」「生」などの課題に取り組み、実際に心理臨床家として長年にわたり病院にも勤務されていました。カウンセラーまた僧侶という立場から、新潟県内の病院のビハラー病棟で仕事をされたのは、このような思いだったからでしょう。いろいろな研究や実践活動の背景に、どうしても宿縁があるような気がしてなりません。大学教授と住職とを兼務されていたころは、とてつもなく多忙な日々だったことと思います。定年退職後は住職に専念し、それまで以上に僧侶の職を愛されたことは、これも仏縁、宿縁だろうと思います。先生は開かれた寺の役割を描かれ、本堂等でたびたび勉強会を催されました。その内容は心理学や仏教の教え、子育てから老いに至るまでの幅広い人間生活に及び、その様子は、「現代の寺子屋」として新聞にも報道されたほどです。先生の地域に密着した社会貢献の一端です。

本学会において、高嶋先生の貢献は決して研究業績だけではありません。学会の新たな発展期に長年にわたって常任運営委員(現在の常任理事)を務められました。また、応心第62回大会が共立女子大学で盛大に開催されたときの大会準備委員長で、私も準備委員のひとりとしてお手伝いさせていただきました。さらに本学会「応用心理士」資格認定審査委員会委員に就任され、最初の第1号認定証は当時の学会会長であった「高嶋正士」の名前で交付されています。奇しくも私の認定証(第4号)は先生ご自身の直筆で、ゆったりとした軽妙な墨筆になっています。本学会に対する多大なご功績により、1995(平成7)年、常任理事会、理事会、総会において満場一致で名誉会員にご推挙されました。

高嶋先生と私とは伯父-甥の関係になりますが、私が1つ目の大学の卒業が近づき、社会へ出ることを何となくためらっていたモラトリアムのころ、もう一度学生に戻って心理学を学び直したいと相談しました。学士編入学する大学を熟慮していたとき、先生は母校でもある日大心理学科を推薦されました。幸いに入学が許可され、そのおかげで大村政男先生、山岡淳先生、花沢成一先生(3名の先生とも本学会名誉会員)など、当時の日大心理学科を代表する気鋭の先生方に巡り合うことができました。これもご縁です。晩年、大村先生、山岡先生、山内茂先生とご一緒に、真照寺に高嶋先生を訪問したことは、今から思えば何とも贅沢な体験でした。1980(昭和55)年7月、私がまだ大学院生のとき、東ドイツのライプチヒ大学でVENTを

たたえる第22回国際心理学会が開かれました。高嶋先生に誘われて、院生の身分ながらほぼ1か月間、学会参加をはじめオプシオンで欧州各地を旅してまわりました。その間の宿舎はいつも先生と同室で、心理学や人生のことなどを語り合いました。添付の写真は、先生と一緒に会場前の看板のところで記念撮影したものです。

最後に、高嶋先生のエピソードをご紹介します。1962(昭和37)年10月、先生が初めて欧米4か国へ研究視察に出かけられたとき、羽田から搭乗した飛行機の中で、本当にたまたま偶然にも隣の席に作曲家の古賀政男氏が座っておられ、サンフランシスコまでずっと話をしながら一緒にしたとか。そのとき古賀氏から「君、帰ったら家にも来てくれ」と言われて名刺をいただいたそうです。帰国後、世田谷のご自宅へご挨拶にお伺いしたところ、何とそこに、歌手の田端義夫、島倉千代子、そして美空ひばり(敬称略)の3人の方々がおられたのです。古賀氏がこの3人の歌手を紹介してくださったことがきっかけで、高嶋先生はすっかり歌を聴くのが好きになられたそうです。先生のことですから、きっといろいろな話題を出して談笑されたのだらうと思

います。先生によれば、なかでも田端義夫と美空ひばりのお二人には特別な思い入れがあるようで、美空ひばりの葬儀に参列し、6月24日の命日には横浜の墓地へ欠かさずお参りに行かれていたとのこと。そういえば、家族葬ではありましたが、先生の通夜と告別式の会場では、式が始まるまでの間、場内に美空ひばりの数々の歌がずっと流れていました。これも奥様のやさしいお気遣いだと思います。先生の法名は「真照院釋正士」、ご葬儀には築地本願寺からご導師様をお迎えし、厳粛の内に執り行われました。

私にとりまして、高嶋正士先生は、父のようでもあり、また恩師でもありました。先生は長く心理学教育と研究に情熱を捧げられ、心理学界と本学会の発展に大きくご貢献なされました。大伯父米峰氏の言葉を守り、先生には良い人生だったと思います。ご葬儀は家族葬でしたので、学界関係者の方々はお別れが叶いませんでしたが、「出会い」を大切にされ、心理学を愛され、寺や郷里を愛され、そして奥様ご家族皆様を愛された高嶋先生は、幸せな95年のご生涯だったと思います。御遺影を眺めるたびに、先生との在りし日の出来事が思い出されます。先生の御恩に心から感謝申し上げますとともに、ここに謹んで哀悼の意を表します。高嶋正士先生、どうぞ私たちをご浄土よりお見守りください。ありがとうございました。合掌



藤田主一 高嶋正士先生  
(1980年当時)

#### ■略歴

1925年8月23日 新潟県に生まれる

1949年 龍谷大学文学部哲学科卒業(旧制)、京都大学文学部心理学科聴講生修了

1951年 日本大学文学部心理学科卒業(1949年4月学士入学)

1957年 日本大学大学院文学研究科博士課程心理学専攻単位取得満期退学

1964年 国士館大学政経学部教授

1969年 共立女子大学短期大学部教授

1970年 『人格の偉大性要因に関する基礎的研究—偉人・優秀児を中心として—』で文学博士(日本大学)

1990年 共立女子大学家政学部教授(1994年より共立女子大学大学院家政学研究科教授)

1996年3月 共立女子大学定年退職、共立女子大学名誉教授

#### ■日本応用心理学会における活動

1951年 日本応用心理学会正会員

- 1976年 日本応用心理学会常任運営委員（現在の常任理事）  
1994年 日本応用心理学会会長  
1995年 日本応用心理学会第62回大会（共立女子大学）準備委員会委員長  
1995年 日本応用心理学会名誉会員

■主要著書

- 1959年 『青年心理学概説』 成文堂書店  
1967年 『MCC ベビーテスト』（共著）同文書院  
1973年 『母親への助言：0歳～6歳までの考える家庭教育』（監修）母と子ども社  
1975年 『現代教育心理学』（共著）芸林書房  
1978年 『臨床看護心理学』（共著）学苑社  
1983年 『精神衛生・臨床心理』（共著）医学出版社  
1996年 『発達と教育の心理学』（編著）福村出版  
1997年 『偉人・天才の心理学』 医学出版社 他多数

■主要論文

- 1968年 伝記にあらわれた宗教的偉人の偉大性—法然・親鸞・日蓮の性格分析を中心に—, 現代心理学論集, 明星大学心理学研究室.  
1968年 Test for the diagnosis of psychosomatic disease in infants, Psychologia, 11.  
1975年 DDST と MCC テストとの比較, 共立女子短期大学家政科紀要, 18.  
1982年 男性・女性・性差の今日的課題（共著）, 応用心理学研究, 7.  
1989年 わが国における「神経質」に関する研究の歴史的展望, 神奈川歯科大学基礎科学論集, 6.  
1990年 KIDS（乳幼児発達スケール）の開発に関する研究（共著）, Human Developmental Research, 6.  
1992年 親鸞のパーソナリティ形成要因に関する一考察, 共立女子大学紀要, 38. 他多数